

## 中部ジャワ村落社会とその変化

—— ジャワ農村の20年 ——

戸 谷 修

The Central Javanese Rural Society:

—— Its Structural Transformation in the Past twenty years. ——

Osamu TOTANI

### 1. はじめに

本稿は、いままで行ってきた東南アジア諸地域の調査研究のうち、中部ジャワ村落を対象を絞り、当地域の村落にみられるいくつかの特徴や、筆者が初めてその村に訪れてから20年間の経過のなかで、それらの村々は現在どのような変化がみられるかを明らかにしようとするものである。

この20年はスハルト政権が経済開発を積極的に推し進めた1969年から1994年までの五次にわたる経済開発計画25年間の時期でもあり、インドネシアが全体的に大きく変化した時でもあった。表1は国内総生産 (GDP) がどのように増加し、部門間にどのような変化があらわれたかを示したものである。GDP の構成からみれば、1971年には GDP の40%以上を占めていた第1次産業のシェアは95年には16.1%に激減している。うち食糧生産農業の対 GDP 比も26%から9.7%へと半減している。これに対して、第2次産業の動きをみると、80年代後半からの製造工業の伸びは著しく、90年代時点では、そのシェアは食糧生産農業部門を大きく上回るようになってきている。GDP からみれば、われわれがはじめに調査に訪れた70年代ははじめから現在に至る20年の間にインドネシアは農業国から工業国

表1 国内総生産の産業部門別構成 (当年価格)

(単位: 10億ルピア, カッコ内%)

	1971年	1980年	1990年	1995年
国内総生産 (GDP)	3,672(100.0)	45,446(100.0)	197,721(100.0)	383,051(100.0)
第一次産業	1,646( 44.8)	11,290( 24.8)	43,062( 21.8)	61,637( 16.1)
第二次産業	729( 19.9)	19,484( 42.9)	78,178( 39.5)	160,546( 41.9)
第三次産業	1,297( 35.3)	14,671( 32.3)	76,481( 38.7)	160,868( 42.0)
食糧生産農業	961( 26.3)	6,358( 14.0)	26,066( 13.2)	36,982( 9.7)
製造工業	307( 8.4)	5,288( 11.6)	38,602( 19.5)	91,929( 24.0)
鉱業	294( 8.0)	11,673( 25.7)	28,748( 14.5)	35,145( 9.4)

(出所) Biro Pusat Statistik, *Statistik Indonesia* 1975, 1983, 1991. 各年版, Jakarta, 1976, 1984, 1992.  
1995年数字は中央統計局資料より作成。

へと大きく構造転換を成し遂げようとした時期でもあったことが理解される。しかしながら、表2に示したように1990年時点での産業別就業人口からみると、製造工業の就業人口は、ようやく10%を超えた程度で、全就業人口に占める農林漁業の就業人口比56%に遠く及ばない。このことは、インドネシアが大きく産業構造の転換を迫られているとはいえ、依然として農業部門に高い雇用吸収力の維持を求められていることを示しているものでもある。そのような意味では、本稿はこの二十数年間に及ぶ開発政策が中部ジャワ農村をどのように変え、いかなる問題を投げかけているのかを問うことにもなろう。

表2 10歳以上就業人口の産業部門別構成

(単位:1,000人 カッコ内%)

	1980年	1990年
農林漁業	28,040( 54.8)	42,378( 55.9)
鉱業	369( 0.7)	528( 0.7)
製造工業	4,361( 8.5)	7,693( 10.1)
電気・ガス・水道	85( 0.2)	135( 0.2)
建設業	1,573( 3.1)	2,060( 2.7)
商業・飲食店	6,611( 12.9)	11,067( 14.6)
運輸・倉庫・通信	1,468( 2.9)	2,312( 3.1)
金融・保険・不動産	232( 0.5)	478( 0.6)
行政サービス	7,739( 15.1)	9,070( 12.0)
その他	47( 0.1)	128( 0.2)
不明(無回答)	666( 1.3)	-( - )
合 計	51,192(100.0)	75,851(100.0)

(出所) ・Biro Pusat Statistik, *Statistik Indonesia 1981*. Jakarta, 1982.・Biro Pusat Statistik, *Statistik Indonesia 1991*. Jakarta, 1992.

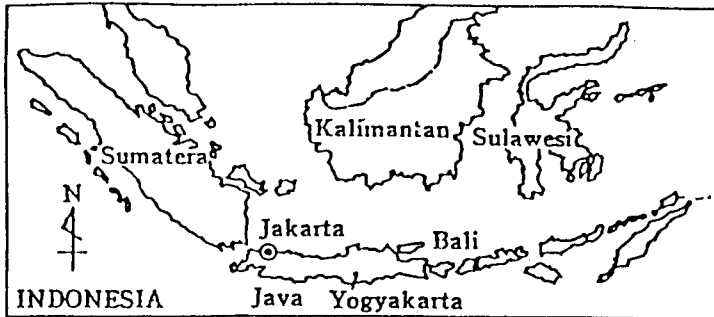
## 2. 村落社会の構造と変化

わが国の村落であれば、かつて「東北型」といわれた村落を対象としても、また、「西南型」といわれた村落を対象としても、いくらかの違いはあるものの両者の間には本質的に共通する社会文化的特性がみられたものである。ところが、インドネシアの場合には、それぞれの地域では種族、言語、生活慣習、親族組織、ときには宗教まで全く異っていて、そのうえに成り立っている社会制度にしても、行動様式にしても他国へ行ったと同じくらい異なっている場合が多い。70年代のことであるが、中部ジャワからの帰り途、スマトラへ立寄ったことがある。そのときの印象では、スマトラはジャワと同じインドネシア共和国であるとはいえ、ジャワとはきわめて異質な社会であると思わざるをえなかった。スマトラとジャワがともにインドネシアとなっているのは、当時の独立運動の指導者たちが独立宣言の際オランダ領東インド全域を版図とすると宣言した結果であって、全く人為的に定められたものに過ぎない。われわれがかつて学んだ19世紀の西欧の国民国家をモデルとして構築されたネーションという概念から考察する限り、ジャワとスマトラとが一つの国をつくっていること自体が不可解なことであった。したがって、多様性に富むこのインドネシアで、限られた期間内にどこを対象として効率よく調査をするかは大きな問題とならざるをえない。70年代初め頃、われわれはスハルト政権下で開発政策が進められていく場合、インドネシアの中核的な地域であるジャワ社会に注目したのは当然であるし、しかも、

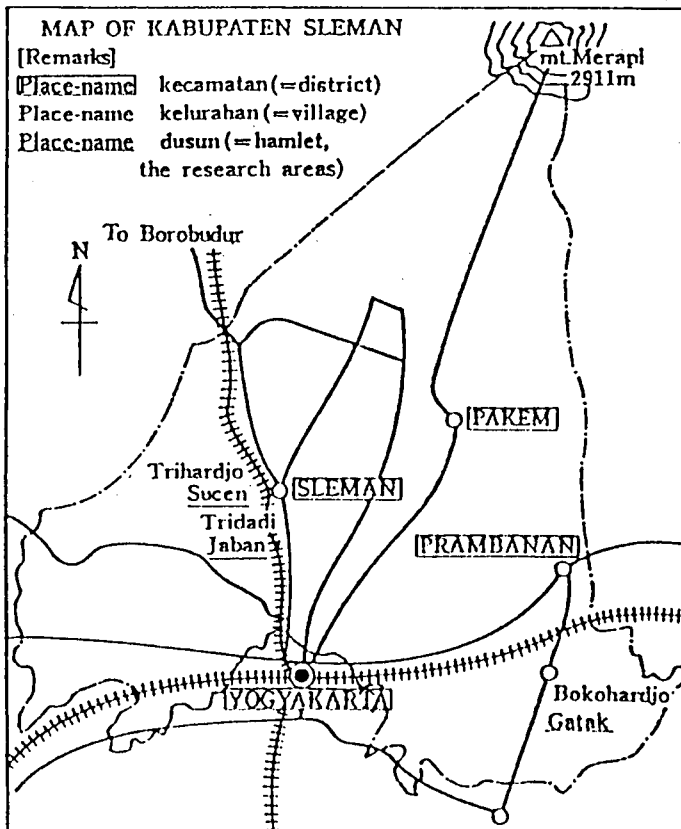
## 中部ジャワ村落社会とその変化

その経済開発の成否が民族の内発性に依拠することが大きいことからいえば、ジャワの伝統的価値意識が典型的に考察されうる地域として、中部ジャワの村落を事例として選んだのは当然のことであった。<sup>1)</sup> 当地域の村落の事例となったのは、ガジャマダ大学の研究者たちのアドバイスを得て、古都ジョクジャカルタから30km程離れた二つの村落、一つはプラ

地図(1) [インドネシア]



地図(2) [スレマン県とジョクジャカルタ本市]



ンバナンの遺跡に隣接するボコハルジョ村ガタック集落、もう一つはトリハルジョ村スチャン集落であった。

ジャワでは行政村のことをカルラハン (kelurahan) とよぶが、これは今世紀初め頃、いくつかのデサ (desa) とよばれるかつての「むら」を集めて一つの行政村をつくった際の名称である。このカルラハン日本の村に比べると村としての纏まりも村意識も稀薄である。戦前日本の村落を調査したアメリカの社会人類学者 John F. Embree が日本の村をタイトな村とிட்டのと対比させれば、ジャワの村はルースな村ということになろう。村がルースな性格だというのは、単にジャワの村だけでなく一般的に東南アジアの村についてもみられる現象である。

行政村はいくつかの集落によって構成されている。トリハルジョ村は12の集落からつくられており、またボコハルジョ村は13の集落からつくられている。この集落の数は20年たった現在も変っていない。村びとたちが親しみを込めてデサというのはこの地域ではこの集落のことである。一つの自生的な結合体としての「むら」という場合、中部ジャワではこのデサをいう。日本のかつての藩政村、鈴木栄太郎氏が用いた自然村というレベルに当るものを中部ジャワで求めるとするならば、デサがこの自然村に当る。社会学や経済史、文化人類学などの現地調査では、この自然村に当る一つの集落を事例としてとりあげ、そのコミュニティ内での生産構造、階層構造、社会組織、村の権力構造、家族・親族、宗教、教育などの詳細なモノグラフをつくることによって、一つの民族社会を描き出すという手法をとってきた。70年代初めの中部ジャワ村落の調査研究でも筆者自身もこの方法によってモノグラフを作成したものだった<sup>2)</sup>。もっとも、この手法は集落がまとまった完結した一つの小宇宙として存在している限りでは有効であるが、現在のように商品経済が深まり、遠隔地への労働力移動が大量に行われている現在では、必ずしもその地域社会だけを対象としただけでは、十分描き出す適確な手法ではなくなってきているように思われる。

このあたりのデサはどの集落も中部ジャワの穀倉地帯の中心地域であることもあって、70年代初め頃訪れたときには広々とした水田のなかに散在する椰子林に覆われていた。椰子林は遠くから眺めると水田の中に浮ぶ島という感じであった。非常によく手入れされた田園風景は、まだ機械化されていなかった戦前の日本農村の風景そのものだった。当時、昼なおうす暗い椰子林の中を狭い小路を辿って入っていくと鬱蒼と茂った椰子林の中から集落の家々が現われたものだった。しかし、20年後のいま、外観だけから見ると、かつて集落を覆いつくしていた鬱蒼とした椰子林はない。集落内の世帯数が増えて家屋が多く建てられたためか、また集落の小路が自動車の通れるくらいに広くなったためか、かなり伐採され、かつてのように昼なお暗いという感じではなくなっていた。対象としている二つの集落は、70年代初めの頃では、世帯数ともに100戸前後、人口はいずれも500人程度であった。しかし、1996年現在、トリハルジョ村スチャン集落では表3に示したように、世帯数183戸、人口750人となり、1973年当時に比べて世帯数で約60%、人口で約50%程ともに増えている。一世帯当りの平均家族成員数は、この20年間にどの集落も減少し、4.79人となっている。また、ボコハルジョ村ガタック集落では表4に示したように現在世帯数194戸、人口937人となり、ここでも1973年当時に比べて世帯数で約15%、人口で約90%ほど増加している。なお、一世帯当りの平均家族成員数も3.90人となり、どの村々にも少子化の傾向が著しく広まっていることを知ることができる。彼らの村で「村の変化のなかで最も変っ

中部ジャワ村落社会とその変化

表3 トリハルジョ村の集落別世帯ならびに人口数（1996年5月）

dusun 名	世帯数			人口数			1996年 1世帯当り の人数	1973年 1世帯当り の人数	1996/1973の 世帯数の増加 1973=100	1996/1973の 人口数の増加 1973=100
	計	男の家長	女の家長	計	男	女				
① Slemen Kota	229	191	38	940	439	501	4.10	5.33	126	97
② Sucen	183	147	36	750	378	372	4.09	4.32	156	149
③ Sleman	237	193	44	959	485	474	4.05	5.02	132	106
④ Kantogan	307	280	27	703	354	349	2.29	4.39	140	122
⑤ Ngangkrik	343	306	37	1,387	664	723	4.04	4.69	145	125
⑥ Krapyak	322	267	55	1,238	599	639	3.84	4.28	136	123
⑦ Muragan Timur	377	320	57	1,577	787	790	4.18	5.30	190	150
⑧ Muragan Barat	435	381	54	1,713	837	879	3.94	4.70	166	139
⑨ Paggeran Timur	250	211	39	957	475	482	3.83	4.74	177	143
⑩ Temulawak	346	297	49	1,444	702	742	4.17	4.41	136	129
⑪ Sebaya	164	142	22	635	325	310	3.87	4.92	89	70
⑫ Paggerau	155	129	26	586	290	296	3.78	5.81	135	88
計	3,348	2,864	484	12,889	6,332	6,557	3.85	4.79	150	120

（出所）トリハルジョ村役場資料より作成

表4 ボコハルジョ村の集落別世帯ならびに人口数（1996年）

dusun 名	世帯数			人口数			1996年 1世帯当り の人数	1973年 1世帯当り の人数	1996/1973の 世帯数の増加 1973=100	1996/1973の 人口数の増加 1973=100
	計	男の家長	女の家長	計	男	女				
① Puleredjo	197	152	45	657	299	358	3.33	4.13	80.6	146.0
② Karangasem	283	212	71	1,136	575	561	4.01	5.51	72.7	177.7
③ Karanggan	303	222	81	1,125	556	569	3.71	4.71	78.7	141.3
④ Gatak	194	139	55	937	501	436	4.82	4.21	114.4	190.4
⑤ Ringinsari	182	148	34	667	323	344	3.66	4.30	85.1	146.2
⑥ Dawung	108	96	12	397	199	198	3.67	4.10	89.5	115.4
⑦ Tjepit	198	151	47	684	229	455	3.45	4.49	76.8	167.2
⑧ Marangan	198	151	47	836	394	442	4.22	4.33	97.4	135.9
⑨ Madjasem	96	85	96	391	191	200	4.07	3.60	113.0	143.2
⑩ Djobohan	122	104	18	480	227	253	3.93	4.19	93.7	112.4
⑪ Pelemsari	168	139	29	637	298	339	3.79	5.05	75.0	145.1
⑫ Djirak	80	67	13	326	169	157	4.07	4.37	93.1	114.7
⑬ Djamusan	172	118	54	711	381	330	4.13	4.41	93.6	115.2
計	2,301	1,784	517	8,984	4,342	4,642	3.90	4.33	90.0	143.9

（出所）ボコハルジョ村役場資料より作成

たことは何か」と尋ねると、「それぞれの家に電燈が灯るようになったこと、それに女性の生活態度が変わったことだ」という。かつては多くの子どもを生み家事や育児にかかりきりになっていたが、現在では若い婦人たちは子どもを2～3人しか生まず、その結果育児に手がかからなくなったので外へ出て働く女性が著しく増えてきたという。

村びとたちの生業は70年代初め頃は、二つの集落とも90%近くの世帯が農業であった。しかし、貨幣経済が深まるなかで現在、トリハルジョ村では近くの土木工事に日雇いとして働きに出る人、また同じ建設現場の仕事をやるにしても、村の周辺では1日6,000ルピア（日本円で約300円）の日当にしかならないのにジャカルタでは1万ルピア稼げるということで、同じ仕事をやるならばジャカルタへ出稼ぎにいくものも多くなっている。また、この村の周辺にも、かつての砂糖工場を利用して1979年、生産をはじめた縫製工場をかわ

きりにプラスチック工場、電気部品の工場など、いくつかの企業が進出してきているので、それらの企業に勤める人びとも多くなってきている。工場の規模は様々であるが縫製工場の場合、従業員は200人ぐらいであった。また、ボコハルジョ村の最近の職業構成は表5の通りである。農業に従事しているものは、村の全就業者の60%になってしまっている。二つの村ともにこの20年間に職業構成にも大きな変化がみられる。

表5 ボコハルジョ村職業別人口 (1994年)

A. 従業者	人	D. 職人	127人
公務員	547	E. 農業労働者	915
軍人	61	F. 年金受給者	98
民間会社員	193	G. ゴミ回収人	14
B. 民間企業家・商人	273		
C. 農民	1,122		

(出所) ボコハルジョ村役場資料より作成

ところで、1950年代の頃であったが、わが国の農村社会学や経済史などの分野では村落共同体をどう捉えるか<sup>3)</sup>ということが大きなテーマとなっていた。当時わが国の農村研究では、共同体規制の物的基盤として共有地（入会地）の存在は水利組織とともに強い関心がよせられていた。この共同体の物的基盤を探る問題はアジアの共同体をどう捉えるかという問題と深くかかわっていたことから、ジャワの村落調査でも当然のことながら、共有地の実態把握はきわめて関心のあることであった。調査対象とした二つの村では、全耕地面積の20%が共有地であった。中部ジャワの村々ではかつて割替制度が行われていた頃は全耕地面積の60%近くが共有地（共同占有地）であったという。かつて日本の農村では共有地は入会地とよばれ、そこで村びとたちが薪をとって来るとか、茅や樹木をとってきて建築資材にするとか、田畑の緑肥、家畜の餌を入手するところとして村びとたちの日常生活や農業生産に欠くことのできないものとなっていた。これに対してジャワでは共有地はいつの頃からかは定か<sup>サダ</sup>ではないが、村長、集落の長、村役人たちに対して、給料代りに分け与えられ、役職田（Bengkok）として利用されていた。ボコハルジョ村に例をとれば、村長は4.3ha、5人の村役人には2.4ha ずつ、13の集落の長にはそれぞれ1.5ha 程度の水田が分与されていた。この点は20年余り経過した現在でも全く変わっていない。一般の農家が平均30アールの水田しか保有していない状況のもとで、村の役職者たちに分与されている役職田の広さは極めて大きいものといえよう。日本農村の場合、村の共有地は村びとたちの生産や生活に直結していたので、それは村落共同体の物的基盤と考えられていたのであるが、ジャワの村ではかなりの共有地があるもののそれは役職田として現在は利用されており、その性格は日本農村の共有地とは全く性格の異なるものであることを確認した。

農家の耕地所有は全体的にきわめて狭小である。ボコハルジョ村ガタック集落についていえば以下の通りである。耕地を全く所有していない世帯が農家全世帯の1/3近くもあり、上層農家に位置づけられる100アールから150アールの耕地所有者、数世帯を除けば、残りのすべては50アール以下の耕地を所有する農家であった。70年当時4人家族で30アール程度の耕地を所有していれば、なんとか生計を立てていくことが出来るといわれていた。こ

の基準でいっても、ガタック集落では、農家全世帯の約2/3が自分の所有する水田だけでは生計を立てていくことが出来ず、共有地を分与された村の役職者のところへ農業労働者となって働きにいたり、出稼ぎにいたり、行商などをして生計を補わなければならなかった。

われわれが調査対象とした二つの村は、70年当時はいずれも農業に従事する世帯が圧倒的で、その90%近くの世帯が農業を生業としており、また、そのすべてが水田稲作を主とする農業経営であったから、それぞれの農家の土地所有の大小がそのまま階層を規定する尺度となったが、現在のように多くの人びとが農業以外から収入を得ており、自らの耕地で農業生産に従事する農民が全就業者数の1/3程度になってしまい、しかも同じ農業に従事するものでも、かつてのように一様に水田稲作に精を出しているだけの農民ではなくなり、それほど多くの耕地を所有していないのに収益の大きい商品農作物を栽培して多額の利益をあげているものもいる状況のなかでは、かつてのように村の階層構造を土地所有の大小だけで捉えることは全く意味を持たなくなってしまった。この点も20年間の大きな変化である。

日本の農地改革以前の農村にみられたような広大な水田を所有して、それを多くの小作人に貸しつけてその小作料によって富を築いているというような寄生地主は少なくとも中部ジャワの村々には見られない。これらの村では最も大きな地主といっても村の共有地から与えられる役職田を合わせてもせいぜい10ha程度しか保有しておらず、戦前の日本農村にみられたように地主・小作関係が最も重要な社会矛盾となっているという社会関係ではない。にもかかわらず、それぞれの農家の土地所有が全体的に極めて零細なものになぜなっているのだろうか。それは戦前の日本にみられたような農民層の階層分化によるものではなく、ジャワの場合、古くから行われてきた相続方法によるものである。この地域では相続方法が、男女を問わずすべての子どもに均等に親の土地・財産を分け与えるという慣習法か、男の子2に対して、女の子1の割合で親の土地を分け与えるイスラム法のどちらかが選択されているため、結果的に土地の零細化が著しく進行していくのである。<sup>4)</sup> いずれにせよ、男女を問わずすべての子どもに親の土地を分割するという方法を代々とっているのであるから、土地所有の零細化が深まるのも当然である。この点は戦前の日本社会のように、家産を分散させないために長子単独相続制をとってきたところとは大きく異なっている。以上のようにみていくと、ジャワで古くから行われてきた相続の慣行が彼らの経済的貧困と深くかかわっていることが理解されよう。

つぎに、役牛の飼育状況の変化、村落での生活環境の変化、農業の機械化の動向などについて述べておこう。どこの社会でも、田畑の耕運、整地作業には耕運用の機械が導入されるまでは牛や馬が農耕用に使用されていたものである。この地域でも牛が農耕用に利用されていた。70年代のはじめ頃訪れたボコハルジョ村では表6にみられるように、当時牛443頭、水牛27頭が役牛として飼育されていた。つまり3戸に1頭の割合で牛または水牛が飼育されていたものだった。一般的傾向としては、上層農家では数頭も牛を所有している農家もあり、下層農家では全くといってよいほど役牛を所有していなかった。したがって上層農家から牛を借り、その借用代は収穫物や労働で返済していた。この役牛についての状況はトリハルジョ村の場合も全く変りはなかった。

ところが20年を経過した現在、トリハルジョ村では、この役牛の共同飼育を行うように

表 6 ポコハルジョ村の主な家畜の所有状況

	1972年	1973年	1993年	1994年
地鶏 (羽)	5,241	5,329	16,500	16,515
あひる (羽)	—	—	1,205	1,327
山羊 (頭)	239	227	45	65
羊 (頭)	246	235	440	294
乳牛 (頭)	—	—	—	—
牛 (頭)	453	443	215	208
水牛 (頭)	32	27	12	10
馬 (頭)	26	28	5	4

(出所) ポコハルジョ村役場資料より作成

なっている。スチャンの集落もトリハルジョ村が共同飼育に取り組みはじめた1993年から村のプロジェクトを受ける形ではじめたという。かつてはこの集落では個々の農家で役牛を飼育していたが、現在、約60頭の牛が共同飼育場で飼われている。集落の共有地に縦横10m四方程度の一区割を借り受け、そこに牛舎を各自がつくり、1年間に6万5,000ルピアを土地の借用料として集落に支払うという。最も牛を共同飼育場で管理してもらうといっても、牛の餌は持ち主があらかじめもってきておくことになっている。トリハルジョ村では牛を共同飼育場にあずけることが出来るようになって、牛を所有している農家でも安心して工場へ働きに出たり、長期間ジャカルタの建設現場へ出稼ぎにいけるようになったという。この村では牛の共同飼育は出稼ぎへの一つの対応策でもあったのである。

この村では、かなり多くの「土地なし農民」が70年代の後半から80年代にかけて都会へ出ていってしまったので、いまでは土地なし農民の数は以前に比べて著しく減っている。また、この村では、1982年に電気が入ったが、当初のうちは電気代が高いのであまり利用されていなかったという。ところが1993年頃には政府の補助などもあり現在ではどこの家にも電燈が灯っている。しかし、電気代は高く1カ月1万ルピアも支払わなければならないとのこと、彼らの農家1カ月の生活費がきりつめて10万ルピアかかるというから、そのうちの電気代1万ルピアは非常に大きく家計にのしかかっていることになる。村びとたちは「昔のような生活をするのならそれでよいが、いまは現金収入がある程度ないと、いまの時代に則応した生活はできない」と語っていた。子どもをジャカルタへ送り出してやるにしても学歴がなければまともな職にもつけなくなったいま、子どもたちを高校へ入学させることは親たちの願いとなっていること、テレビの購入意欲の高いこと、公共の交通機関が何もないこの農村ではバイクが通勤のため必要になってきていることなどをあげていた。この村の若者たちの多くは、都市の消費文化にあこがれて大都会へ出ていく。80年代までは、男の子だけが中学を卒業すると出ていったものであるが、いまでは女の子も小学校を卒業すると住み込みの家事手伝いとして出ていくものが増えてきたという。村びとたちのなかには都会へいけば今よりよい生活が出来るのではないかと考えている人びとが多いことも、この村が経済的に立ち遅れているためか強い。村びとたちは彼らなりに自分たちの農村と都市との地域間格差を厳しく感じとっている。

ところで、この村での農業の機械化の現状について尋ねてみた。ハンド・トラクター



(小型耕運機)が村に1台、農業協同組合所有のものがあ、それで耕地作業を申し込むと、その耕運機は朝7時から10時までの3時間操作する運転手の日当代1,000ルピア、それに彼に食事、飲物を出すという条件で利用できるという。ただ、耕運機がこの村であまり積極的に導入されていない理由として、村長は次のように語っていた。この村は傾斜地が多く、それにムラピ山の火山灰で出来た土壌なので小石を多く含んでおり、ハンド・ドトラックターを使うと、すぐに故障してしまうので村びとたちはいままで通り牛を使って耕起作業をしている。また、小型の耕運機であるといっても、農道がよく整備されていないと、水田まで耕運機をもっていくことは困難である。この村では農道がまだ十分整備されていないこともあって、耕運機を利用するのは便利だとはいえない。」と村長は語っていた。彼は以上のように語ってはいたが、より基本的には、耕運機の購入費がこの村びとたちの農業収入に対してまだ極めて高価なものであること、それに過剰人口を多くかかえていたこの村に生産性の極めて高い農業機械が入りこめば、村びと自身、みずから労働の機会を失ってしまうのではないかという危惧も根強く働いているものと思われる。

つぎに、ボコハルジョ村の牛の飼育状況、村びとたちの暮し向きの変化、農業の機械化の進行状況について述べておこう。ジャワでも、西ジャワや東ジャワでは、農業の機械化は著しく進行しており、当地域でも、すべてトリハルジョ村のようなところばかりではないと思ったので、ボコハルジョ村ではまず農業の機械化の状況から聞き取りをした。「ボコハルジョ村では耕運機は多く利用されているか」と尋ねてみた。ボコハルジョ村では現在ハンド・トラックターが10台ぐらいい購入されており、それらはすべて上層農家が個々に所有していて、それぞれの農家に1日5,000ルピアで賃貸しているという。多くの農家が賃借りして利用しているということであった。たしかに、ボコハルジョ村に来て水田を見渡すと、農道はよく整備されており、耕運機が出入りしやすくなっている。そこで、この村の牛の飼育頭数などについて調べてみると、前掲の表6の通りであった。この表によれば牛の飼育頭数はこの20年間に約半分に減っている。小型の耕運機が役牛にとって代ってきているのである。それでもまだ20年前の半分の牛が飼育されているので、この点について聞いてみた。すると、ボコハルジョ村でもトリハルジョ村の場合と同じように牛を共同飼育している集落が3カ所あることがわかった。これは1994年から村のプロジェクトとして行われているものであるという。しかし、ボコハルジョ村の牛の共同飼育はトリハルジョ村で行われている耕起用の役牛を共同飼育しているのではなく、生まれて間もない小牛を共同飼育し育てて売るといった内容のものであった。ここでは肉牛の共同飼育であって、共同飼育の団地の一角をこの肉牛の飼育農家が1年に土地代として15万ルピアを支払って借り受けるという制度である。生まれて間もない小牛を1頭10万ルピアぐらいで10頭単位で買入れ6～10カ月間共同飼育場で育て10頭を単位として1,000万ルピアで売却しているということであった。共同飼育された牛はすべてジャカルタへ出荷する小牛なのである。この動きもプランバナンというインドネシアの屈指の観光地を隣りにもち、この村全体がその観光開発でうるおっているボコハルジョ村20年間の変貌の一つであった。この村はかつて左翼政党への支持が強かったところで元政治犯が多い。この村の報告書によれば105名があげられている。しかしいまでは、開発の恩恵を著しくうけているためか現政権の支持基盤となっているゴルカル (Golkar) に対する支持は絶大的である。1992年の総選挙ではこの村の投票数4,318名のうち、ゴルカルへの投票者3,077名(71.2%)、開発統一党 (PPP)

への投票者772名(17.9%)、インドネシア民主党(PDI)への投票者469名(10.9%)となっていて、この選挙結果からも現政権への支持はとても強いことがわかる。ポコハルジョ村の場合でも、有能な若者たちがよりよい職を得ようとして大都市へ出ていくことは言うまでもないが、トリハルジョ村で語られていたように、村びとたちが現金収入を得たいがために出稼ぎにいくという風潮は全くない。先にも述べたように、ここはプランバンナというインドネシア有数の観光地に隣接しており、観光開発が政府の主導で活発に行われているので、観光施設で働く人びとも多く、またそれに関連する公共事業で働く機会にも恵まれているためか、村びとの流出は極めて少ない。また、この村で労働力の流出を少なくしているのに、この村には現在かなり規模の大きい企業が6、それに小規模なものが2、レストランが9あり、これらの働き口の雇用力もかなり影響しているものと考えられる。また、この村が開発政策の恩恵に浴していることは外観だけからみてもよくわかる。かつては竹垣で囲まれた家々もいまでは一戸一戸ブロック塀で塀をつくっている家が多くなっていて、屋根の上には直径2～3mの大きなパラボラアンテナをとりつけている家も数世帯ある。71年にこの村に電気は引かれたが当時はまだ一般的には普及せず、80年代政府の補助を得て一般の家々まで利用されるようになったという。そして現在では、どこの家庭にも電気が引かれている。テレビも1994年の調べでは162台となっているが、いまでは各戸ほとんど一台は当たり前と考えられるようになっていたとのことだった。村の役人も、「プランバンナに隣接しているこの村は地の利に恵まれていて、遠くへいって働こうとするものは、一年にせいぜい数名程度だと思う」と語っていた。

ここには、20年前、中部ジャワのスレマン地域を訪れ調査をした二つの村に、この二十数年の間に経済開発の恩恵に殆んど浴することのなかった村とプランバンナという観光施設に隣接するという事で観光開発の恩恵を著しく受けている村のちがいをはっきりと見た思いであった。

### 3. 稲作生産にみられる伝統的収穫慣行

この地域の農業生産について著しく関心をもった点だけを述べておこう。ここでは、日本のように四季折々の変化があることもなく、一年中暑いところである。ここで季節感を味うとすれば、雨量の多い雨期と、雨が殆んど降らない乾期とがある。したがって、農作物の生産も雨の多い雨期作と雨の少ないときに作付する乾期作との二期に大きく分かれている。70年の初め頃についていえば、この地域では雨期作では全作付面積の90%近くで水稻が作付され、乾期作では全作付面積のなかばで水稻が作付され、残りのところでトウモロコシ、タバコ、野菜などの換金性の高い農作物が栽培されていた。ポコハルジョ村の主要農作物作付面積は表7の通りである。雨期作、乾期作を問わず、この地域では主食となる水稻が最も重要な農作物として作付されていた。また同表によれば、現在も主要なものは水稻であることには変りはない。

当地域の稲作生産について最も関心をよせたのは、収穫の際、古くから行われている慣行であった。収穫作業はアニ・アニ(ani-ani)とよばれる穂摘刀で一本一本穂摘みされていた。この地域では少なくとも70年代の終りごろまでは、どこの田んぼでもアニ・アニで穂摘みされており、鎌を用いて稲が根切りされるということはなかった。一説には、鎌

表7 ポコハルジョ村の主要農作物・作付面積 (ha)

	水稻	トウモロコシ	キャッサバ	ピーナッツ	豆	タバコ	ささげ
1975年 (wet)	240	8	16	3	2	—	—
1972年 (dry)	145	14	7	35	52	6	—
1993年 (wet+dry)	361	96	3	63	49	—	26

(出所) ポコハルジョ村役場資料より作成

が用いられなかったのはパディー・スマンガートとよばれる稲の霊に対する信仰と深い関係があるといわれている。<sup>テノヒラ</sup>掌に入るほどの小さな穂摘刀で穂摘みをすれば、稲穂に宿る稲の霊デビ・スリを驚かさなからだといわれていた。現在でも、高齢の農民たちはデビ・スリの神の怒りにふれないように鎌を使うということはない。しかし、若い農民たちはデビ・スリの力が及ぶのはジャワの在来種の稲だけであって、フィリピンで開発され導入された多収量の新品種には何らかかわりはなく、鎌を使っても禁制を破ったことにならないといって鎌で刈る人びとも増えている。

いずれにせよ、最も伝統的な収穫慣行についていえば、アニ・アニを右手に持ち、穂首の下30センチぐらいのところから摘みとり、摘んだ穂は左手に集め、摘穂は約3 kgぐらいの束になると束ねていくのである。アニ・アニを使って行うこの穂摘み作業には、誰でも加わることができるということから、収穫期の田んぼには幾十人もの人びとが入って穂を摘んでいる風景をよくみかけたものだった。この収穫作業には村の貧しい農婦たちやその子どもたちが大勢どの田んぼの穂摘みにもやってきて作業をして、その代償として自分の摘んだ稲穂の1/10をもらい、生活の足しにしてきた。この穂摘み作業は穂摘刀で一本一本摘んでいくのであるから、極めて生産性の乏しいものであるが、この伝統的な収穫慣行がごく最近まで永く彼らの社会で存続してきているのは、先にも述べたように稲には稲の霊が宿っているという信仰もあったであろうが、より重要なことは、鎌で収穫作業を行うと生産性が高くなりすぎて、その結果、収穫労働に貧しい大勢の村びとたちが加わることができなくなると考えられてきたからである。ここには増え続ける人口を人手の労働に頼る水田稲作により多く投入し、集約化を深め単位面積当りの収量を増加させながら、収穫物をみんなで分配し、共同体のメンバーにできうる限り均質な生活の保障を計っていこうとする共同体としての配慮が強く機能していたのである。これはC. Geertzがジャワ農村の生活の仕組みの一つを「農業インボリューション」という概念で理解しようとしたものである<sup>5)</sup>。ここでの論理は生産にウエイトをおいたものではなく、生産的紐帯とは異なった社会的結合を基礎とした分配の均質化が追求されているのである。穂摘み作業にどの田んぼへだれでも参加できる伝統的な収穫方法の慣行はドウルップ (derep) とよばれているが、この古くからの慣行で貧しい村びとたちはふるさとの村で貧しいながらも助け合って生活することができたのである。この伝統的な収穫慣行は別のことばでいえば富の再分配を行っていたシステムだったのである。この現象をC. Geertzは「貧困の分ちあい, (shared poverty)」と呼んでいる<sup>6)</sup>。

村落共同体の安寧を最優先に考慮して富の再分配を行ってきたジャワの伝統的な収穫慣行は、彼らの社会で最も大事なこととされるゴトンロヨン (助け合い) の行動規範に支えられて維持されてきたものであることはいうまでもない。また、このお互いに助け合うと

いう行動様式は共同体のメンバーの間で、なんらかの利害の対立が生じてもよく話し合い、妥協し合い事態を丸く収めていこうという人間関係の融和を何よりも重んじようとするルクン（rukun）とよばれる伝統的価値意識に深く根づいたものであることは明らかである。あたたかい助け合いの心をジャワの伝統的収穫の慣行のなかで見出したとき、その心をわれわれ日本社会が戦後の急速な経済発展のなかで失なおうとしていただけに、筆者はインドネシアの社会にふれたよろこびを当時ひしひしと感じたものであった。

#### 4. 貨幣経済の深まりと伝統的収穫慣行の崩壊過程

ところが、80年代に入ると中部ジャワの村々にも、この永く行われてきた伝統的な収穫慣行とは全く異なったトゥバサンという新しい方法が全域でというわけではないが広まりはじめた。<sup>7)</sup> トゥバサンというのは商人や富農による収穫請負制を意味している。これはスハルト現政権の提唱してきた開発政策のなかでジャワの村々にあらわれた一つの大きな変化である。新しいこの方法というのは水田の所有者から水田の収穫物をブローカーが収穫前に見積りで買いとるというやり方であって、ここでは従来の穂摘刀を使わず鎌を用い、しかもこの収穫労働にはブローカーが連れてきた特定の農業労働者で作業するという点が伝統的な収穫方法とは大きく異なっているところである。もっとも鎌を使うだけならば、この80年代になると、伝統的な収穫方法の範囲内でも行われていた。すなわち、それぞれ収穫作業をした人びとに、従来と同じように1/10の収穫物を報酬として与えながらも、収穫作業にはアニ・アニを使わず鎌を使って作業をするところも増えていた。ところが、かつて村びとがだれでも収穫作業に加われたことがこのトゥバサンでは出来なくなってきていることは重大な変化であった。このトゥバサンという収穫方法は以前の伝統的な収穫慣行に比べると①水田の所有者は、収穫作業にやってきた多くの人びとに収穫物の一定量を与えなくても済むので取り分が増えるようになったこと、②従来、農民自身が粃を売の場合、粃が湿っていると買い手の精米業者にひどく値段をたたかれていたが、刈り取った粃は直ちにブローカーが持っていってくれるので個々の農家は粃を乾燥させるための労力もいらないうし、施設をもつ必要もないこと、③トゥバサンによって早く手にした現金で苗代に播く種粃の購入代金や肥料、農薬などの支払い代金にあてることが出来る<sup>8)</sup>という理由で、水田の所有者には徐々に広まっていく傾向にある。この動きは、自分自身の経営を第一に考えるわけであるから、かつて村落共同体の秩序と安寧を最優先に配慮してきた考え方が崩れつつあることを示すものとして注目したい。言いかえれば、彼らの社会が共同体の論理から経済の論理へ移りつつある一つの事象として注目される。いずれにせよ、90年代の中部ジャワの村々では、全域とはいえないにしろ収穫方法にトゥバサンのシェアが次第に大きくなっていることは事実である。70年代の初め頃調査に入った筆者が心あたたまるジャワの心の象徴とさえ感じた伝統的な収穫慣行が開発政策の推進されたこの4半世紀の間に地域の発展とひきかえに崩れつつあることは心淋しいことであった。とりわけ、重視しなければならないことは、いままで穂摘み作業に加わって穂摘みした稲粃の1/10をもらうことによって、なんとか生計を支えてきた土地なし農民のような貧しい下層の村びとたちの家庭経済が完全に崩れはじめ、そのためふるさとでの生活をあきらめて都会へ働きに出ていかなければならないという事態があらわれてきたことである。ただ留意しておき

たいことは、このトゥバサンが現在中部ジャワ全域を覆ってしまったとは必ずしもいえないことである。事実、われわれが調査対象としたトリハルジョ村ではイスラムの指導者が「トゥバサンはよくない」といって禁止しているという。したがって、現在でも伝統的な収穫慣行を行っているのであるが、かつて収穫作業に参加してくれた土地なし農民のような貧しい下層農民たちが大量に村から出ていってしまったり、また企業が設立されて農業以外に働く多くの機会が生じたため、収穫作業に人手が集まらず、その結果、いまでは収穫作業に加わった人びちには以前の分配よりも多い、収穫物の1/8が分配されるようになっている。ここにはかつてみられた様相とはかなり異なった状況があらわれているように思われる。このトリハルジョ村の事例は、貨幣経済の深まりのなかで伝統的な収穫慣行がすたれ、これに代ってトゥバサンがあらわれるようになってきたという単線的な論理だけでは説明のつかないことを我々に示している。この地域は、ジャワの他の地域に比べ、はるかに多くの過剰労働力に溢れていた地域であったこともあって、伝統的な収穫慣行は土地なし農民など多くの貧しい村びとたちの生活がなんとか成り立つように行われてきた相互扶助の一つのシステムであっただけに、たとえ経済的利益にあわなくても、このシステムを崩すことはよくないことだという社会倫理が強く働いているのである。

最後に、村びとたちをふるさとの農村から都市に流出させた最も大きな要因についてみておこう。それは開発政策が推し進められる中で貨幣経済が急激に押し寄せ、村びとたちは現金収入がなければ生活がやっていけなくなったことである。スカルノの時代が終わり、破綻に瀕したインドネシアの財政を立ち直すため、スハルト政権は経済の再建にとりかかったが、その延長線上で行われた開発政策がそれぞれの村落にも影響があらわれるようになったのは70年代に入ってからである。70年代の初め頃についていえば、村びとたちの生活は、まだそれぞれの家に電燈も水道もなかったが、それでも徐々に金<sup>かね</sup>を必要とするようになりつつあった時だった。たとえば、義務教育が普及してくると、いままでならば買<sup>か</sup>い与えなくてもよかったノートを子どもに与えなくてはならないし、シャツも着せて学校へいかせなくてはならなくなった。また、いままで自分の家でとれた農作物で済ませてきた冠婚葬祭の贈り物やイスラム教徒たちの宗教税ともいわれているザカートまでもが貨幣で納めなければならなくなり、村びとたちは以前に比べるとはるかに多くの貨幣を必要とする時代になりかかった時であった。

このような生活環境の変化のなかで、村びとたちは少しでも多くの貨幣を得ようとして水稻の二期作や他の換金作物の作付けにも精を出さなければならなくなったのもこの頃であった。いま振り返ってみると、70年代のはじめ頃がこの地域が大きく変わろうとする時であったと思われる。1973年はじめて当地を訪れた際、二期作がいつ頃から始まったかについて尋ねると、村びとたちは「いまから10年ぐらい前までは乾期には水田を休耕地として休ませていたものだ」と語っていた。この地域では、統計で確認しても60年代頃までは水稻の一期作がまだ一般的で、水稻の二期作を行うことは殆んどなかった。従って、水田には草などを刈<sup>か</sup>ってきて緑肥として投入しておけば、水田への肥料はそれで十分であった。というのも、稲穂を摘みとったあとの藁を、耕起作業する際、鋤き込むのでそれで十分だと考えられていた。この地方の土壌は大部分がムラピ山の火山灰で覆われているので、非常に肥沃な地帯である。そのためか灌漑として供給される水のなかには、水稻の成長に必要なだといわれている窒素、リン酸、加里のうち、リン酸と加里の成分を多量に含んでいるので、

この地域の村びとたちは一期作だけの水稻を作っている時までは肥料に全く関心を寄せることはなかった。ところが、先にも述べたように貨幣経済が急速に深まってくる70年代に入ると、政府の米増産政策もあって、水田の二期作は当然のようになってしまった。このような事態になると、土壌から養分を収奪するのも多くなるから、その収奪した分は肥料を投入して補わなければならない、化学肥料が多量に使用されるようになった。稲作生産に多くの金<sup>カネ</sup>が必要となったのである。貨幣によって購入される化学肥料の使用をより一層多くしたのは、化学肥料の投入、農薬の使用と組み合わせられた多収量を目的として導入された稲の新品種を採用したことだった。その結果、村びとたちは単に消費生活の面ばかりでなく、農業生産の面からもこの70年代に入ると、より一層貨幣経済に巻きこまれていったといえよう。

さらに、70年代から20年たった現在では、水田での稲作もかつてのように単に高収量を目的として生産するだけでは十分でなく、消費者のニーズにあって少しでも高い値段で売ることのできる品種の生産へと農民たちは競い合わなければならなくなった。そのように農民が種籾を選んで購入するようになったこともいままでにはみられなかったことである。また村びとたちの着ている衣類もひと昔前に比べると実にカラフルになった。パティックのサロンを巻きつけている婦人たちの姿もめっきり少ない。街に往き来する若者にいたっては、パティックのシャツを着ているものも殆んどない。衣生活の面でも洋風化が著しいのである。この村々にも3～4年前からどこの家々にも電燈が灯り、テレビも相当数入っており、ボコハルジョ村では村役人はいまでは殆んどの家に入っているのではないかとさえ語っていた。大きなパラボラアンテナをつけている家も数世帯ある。また、自動車はよほど収入の多い人でないかぎり、手のとどかないものであるが、バイクぐらいいは2～3年間の月賦ならば買えるようになってきている。ボコハルジョ村では1994年の調べでは、個人用の乗用車27台（日本円で1台400万円）、バイク118台（日本円で1台250万円）が登録されている。いまこの村々の若者たちに何が最も欲しいかと尋ねると、一様にバイクと答えるくらいバイクへの購入欲は高い。この国で若者たちの乗り廻しているバイクの殆んどはヤマハ、ホンダ、スズキというから、メイド・イン・ジャパンへのあこがれはとても強い。以上述べたように、いま中部ジャワの村々の農家経済はこの20年の間に日常の消費生活の面でも、また農業生産の面でも完全に商品経済の渦巻に巻きこまれてしまったといえる。

このような状況になると、かつて、4人家族で30アール程度の自作経営規模の水田があればなんとか生計をたてていくことの出来た農業経営は、どんなにきりつめてもやっていけなくなってしまい、農外収入を求めなければならなくなってしまった。もう一度以上述べてきたことを繰り返し要約するならば、中部ジャワの村々では70年代のはじめ頃から貨幣経済に急速に巻き込まれていく事態があらわれてきたこと、さらに、これに追いつけをかけるように80年代になると伝統的な収穫慣行が崩れ出し、それに代ってトゥバサンという新しい方法が中部ジャワ全域というわけではないが現われ出し、村から都市への労働力の流出に拍車をかけたといえよう。このような一連の動きの中で、他方では工業化の波が80年代後半以降になるとジャカルタやスラバヤのような大都市はいうに及ばず、中部ジャワの地方都市にも及びはじめ、低賃金をあてにした企業が續々と設立されるようになる<sup>9)</sup>、村での生活が苦しくなっていた貧しい村びとたちは大量に働き口を求めて流出していった

という構図が描かれる。このことは C. Geertz がインドネシア社会の特徴として示した著名な概念、「貧困の分ちあい」さらにはそれに関連した「農業のインボリューション」機能が中部ジャワの村々で次第に機能しなくなりはじめたことを示している。大袈裟に言えば東南アジア社会を分析してきたいままでの概念的枠組がその実態から崩れつつあることを意味している。

## 5. 結びに代えて「開発」で問われていること

ところで、村から都市へ出て来た人びとの暮らしはその後どのようなであろうか。彼らに移り住んだ都市での生活状況については、本稿では紙数の関係上割愛せざるをえないが、概略だけを述べて結びにかえておこう。

農村からやってきた人びとの多くは、その都市のなかにあるカンボンとよばれる居住地に同じ村からやってきたもののどうしが寄りそって生活しているミニ村落に落ち着くという。カンボンに住みついた彼らがありつく仕事は多くの場合、安定したものではなく、その日その日を体を張って働かざるをえない行商、ベチャの運転手、臨時雇いの建設現場の労務者、家事手伝いなどである。いずれも元手も技術もいらないものばかりである。こうした仕事を総称してインフォーマル・セクターとよび、最近ではインフォーマル・セクターで働く彼らを対象にした研究も盛んである。<sup>10)</sup>

ここでは、インフォーマル・セクターで働く一つの事例をあげておこう。筆者がジョクジャカルタで知り合ったベチャの運転手の事例である。彼らの仕事はまだ日が昇らない早朝から始まる。そして人びとが眠りにつく頃彼らの一日の仕事は終る。日中の最も暑いとき木蔭で休むことがあったとしても一日12時間以上は働くことになる。もっとも、いつも自分のベチャに乗ってくれる客があるわけではないから彼らの稼ぎ高はせいぜい5,000ルピア（日本円で250円）程度である。彼らのこの稼ぎ高はインドネシアの底辺で生活している人びとの稼ぎの中で比較するならば、表8に示されているように必ずしも著しく低いということはない。ベチャ運転手の多くは村から金も持たずにやって来たものばかりであるから、ベチャを一日いくらで借りている場合が多い。その一日の賃借料はいま2,500ルピアが相場だという。そうすると彼の手許には2,500ルピアしか残らない。そのなかから、きりつめて一日の食事代として1,500ルピアを当て、残った1,000ルピア（日本円で50円）

表8 インドネシアの地域別最低賃金（1996年4月1日施行）

地 域 名	新最低賃金額			従来最低賃金額		上昇率 (%)
	日額(Rp)	月額(Rp)	日額日本円換算(円)	日額(Rp)	月額(Rp)	
ジャカルタ特別区	5,200	156,000	260	4,600	138,000	13.0
ジョクジャカルタ(中部ジャワ)	3,200	96,000	160	2,850	85,500	12.3
バンドン(西部ジャワ)	5,200	156,000	260	4,600	138,000	13.0
スラバヤ(東部ジャワ)	4,000	120,000	200	3,700	111,000	8.1
バリ島	4,250	127,500	212.5	3,900	117,000	9.0

(注) 円換算レートは、1円=20ルピア。

(出所) 労働大臣布告各号より作成。

を村に残してきた家族への仕送りとして蓄えるという。真夜中、夜の街を歩いていると、街角にベチャを止め、そのベチャに体を曲げて丸くなり、布をかぶって眠りにについているもの、またオフィスの前にベチャを止め、そのオフィスの軒下にごさをひき、その上に布をかぶって横になっているベチャ引きの姿をよくみかける。この姿は都会へ出てきた村びとたちの一つの都会での生活をよく表わしているように思えてならない。このベチャも首都ジャカルタでは交通の邪魔になるという理由でジャカルタから締め出されてしまった。かつて自転車の行き交う街として知られた静かなジョクジャカルタの通りも、いまは自動車やバイクで溢れるようになってしまった。このジョクジャカルタの目抜き通りから、彼らもいつの日か締め出されていくのであろうか。インドネシアの街の底辺で暮している多くの貧しい人びと—その多くが村から移り住んだ人びとであるが—に焦点をあて、彼らの暮らし向きを見つめていると、スハルト政権がこの25年間、開発政策を強力に推し進めてきた「開発」(＝近代化)とは彼らにとって一体どのような意味を持っているのかを思わずにはいられない。たしかに、スハルト政権が進めてきた開発政策は、破産寸前のインドネシアの財政を立直し、年平均6%に及ぶ高い成長率で経済成長をなしとげた功績は大きい。いまでは、ジャカルタには高層ビルが林立し、地方の都市へいっても街々には商品が溢れるばかりである。しかしながら、この開発政策のなかで、以前にくらべて、より一層貧富の差が拡大したことも忘れてはならない。栄華を極めている一部の上層階層の生活ぶりは一般民衆の生活とあまりにもかけはなれ過ぎている。この社会構造の変化の中で、貧しさをより一層負わされてしまった底辺に暮らす人びとを直視するとき、「開発＝近代化」のあり方は厳しく問い直されなければならない時点に立っていることを痛感する。

## 注

- 1) 拙稿、「インドネシア学術調査をふりかえって」、『アジア調査会 アジアクォーターリー』第9巻4号、1977年、pp. 110-119。
- 2) 拙稿、「中部ジャワ村落の社会構造」、『アジア・エートス研究会編『アジアの近代化における伝統的価値意識の研究』、山喜房仏書林、1978年、pp. 52-96。
- 3) 住谷一彦、『共同体の史的構造論』有斐閣、1963年、pp. 335-366。
- 4) 拙稿、「ジャワ人社会における家族の構造的特質」、『アジア調査会 アジア時報』5月号、1976年、pp. 40-48。
- 5) C. Geertz, *Agricultural Involution: The Process of Change in Indonesia*, Univ. of California, 1963, p. 81.
- 6) C. Geertz, "Religious Belief and Behavior in Central Javanese Town," *Economic Development and Cultural Change* 4, 1956.
- 7) 加納啓良、『サワハン』アジア経済研究所、1981年、pp. 117-123。
- 8) 松田藤四郎、金沢夏樹編『ジャワ稲作の経済構造』農林統計協会、1988年、pp. 58-93。
- 9) スルヨ・スデオノ、井草邦雄編、『インドネシアの地域開発と工業化』アジア経済研究所、1993年。
- 10) 日本労働協会『インドネシアの都市労働者』調査研究資料98、東京、1981年。